

沈没船ニール号 大発掘スペシャル



田村 喜子*

はじまりは跡見学園女子大学教授、水中考古学者の荒木伸介先生からの電話だった。

「伊豆半島西岸にあたる妻良港沖(入間)海底に、国宝級の美術品を積んだまま沈んだフランス郵船“ニール号”が130年間も眠っている。30年以上も前に、定置網のメンテナンスのために潜った潜水夫が偶然発見した。海底の鉄製構造物が、そのニール号の一部ではないかと地元で話題になっている。はたしてそれは、宝とともに沈んだニール号なのか？ニール号だと確認された場合は、美術品の引き揚げプロジェクトへ移行したい。ニール号でなかった場合には、同じ海域に沈む他の構造物を調査し、ニール号船体を発見する。調査には東海大学海洋学部がマルチファンビームを用いて海底地形図を作成し、海底下の音波を探索するなど協力し、テレビ静岡が番組の制作を予定している」

というのが電話の趣旨だった。

それから日を置かずして、荒木教授は我が家を訪ねてこられた。そのことだけでも、水中考古学者のニール号学術調査にかける熱意が伝わってきた。

フランス郵船“ニール号”(1734トン、当時最新鋭の汽帆船)は明治6年(1873)、ウイーン万博に出品された純金の茶釜や蒔絵、水晶玉などの日本の美術工芸品を積んで、帰国途中の翌年3月、南伊豆町入間沖で悪天候のため海底に突き出た巨岩に座礁し沈没した。乗客・乗組員97人のうち、生存者はわずか3人だけだった。

ニール号の積荷192箱のうち、沈没の翌年引き揚げられたのは68箱、現地で買い付けた工芸品を含め、120箱以上が船内に残っているものと推定される。その中には、北条政子の手箱(後白河法皇が源頼朝に下賜されたもの)や正倉院宝物など国宝級の工芸品が含まれていたという。

それらの宝物は私にとって何の意味も興味もない。

海の藻屑と消えた94人のなかにたった1人の日本人乗客がいた。彼の名は吉田忠七、30年近く前に書いた『海底の機』の主人公である。

明治維新が成就し、みやこが東京へ遷されたあとの

京都は悲嘆、落胆、寂寥の極みのなかに漂っていた。なかでも高級織物の供給地であった西陣は、最大の顧客であった禁裏や公卿、将軍家、諸大名からの需要を失い、計りがたい打撃を受けた。その再建策が織機の改良による近代化だった。

フランスのリオンでは70年も前に織機の改良が行われていたという情報を得て、京都府は織機の買い付けと技術習得に3人の男をフランスへ派遣した。まったくことばが通じず、生活習慣の異なる地で、彼らがどれほどの苦労を重ね、西陣再建のために努力したか。望郷の思いのなかで、技術を習得し、故国へ帰る日を指折り数えたことか。

他の2人より半年ばかり遅れて吉田忠七がマルセイユ港を発ったのは明治7年2月1日、香港で日本行きの郵船ニールに乗り換えた。明日はいよいよ横浜入港という前夜、遠州灘を航行中のニール号は蒸気エンジンが故障、帆走に切り替えたが時すでに遅く、20メートルを越す強風に吹き寄せられて入間沖の岩礁にはげしく船体を食い込ませた。

「猛り狂い、逆巻く波に呑みこまれていく忠七の頭の中を、いっしょに沈んでいく船倉の機がかすめていった」

最後の1行を書き終えたあとも、忠七の無念さ、痛恨の思いは募る一方だった。

海底の宝物のなかに、忠七の織機が含まれていたら・・・、織機にはかなり大きい鉄製の部品が用いられていたにちがいないから、今回の海底探索でそれが発見されればうれしいなと期待が高まった。

荒木先生、日仏交流史研究家のフランス人、クリスチャン・ボラック氏、元潜水夫で地元でのニール号第一発見者藤井広明氏、そしてテレビ静岡のスタッフたちといっしょに、入間町吉田浜からニール号の沈没地点を眺めたのは7月初めの暑い日だった。水中考古学班、科学調査班、水中撮影班、掘削作業班による海底探索は3ヶ月をかけ、沈没地点に集中して行われた。そうした情景は「沈没船ニール号 大発掘スペシャル」の映像となって何度か地元のテレビに映され、その都

度VTRが送られてきた。

水深36メートル、岩盤の上には8メートルの厚さに砂が堆積し、その上に船が着岸したときにロープをかけるビットと思しき物体が2個突き出ており、そこから船の長さと同様100メートルにわたって金属反応があった。左舷船尾のビットの下には船体が埋まっているはずだ。「NIL」の文字が、もう間もなく確認できるのだ。

エアコンプレッサーで砂が吸い出された。

海面に顔を出した潜水夫は重い口調で報告した。

「ビットの下に船体がつづいているはずだったのに、砂を吸い出したら、10センチから70センチ厚で切れていて、鉄板があるだけで、その下がなく」

「その下がなく？ どういうことだ？ 船名の確認はできなかったのか」

その瞬間、いまにもはじけそうにふくらんでいた期待が、空気が抜けるようにしぼむのを、テレビ画面を

通して、私は共感した。そして吉田忠七の織機は、忠七の形見は永久に海の底に眠ったままだと思った。

沈没船ニール号の調査はこれで終わったわけではない。「状況証拠があり、存在を指し示すものが出揃ってきたのです。次は考古学的証拠による確認が必要になります。今後は磁気探査と船首と船尾へのトレンチ調査を行います。海風が強くないうちに、11月中には調査を終らせたいと考えています」

荒木先生はコメントなさった。

130年の時を経て、海底から「NIL」の文字がテレビ画面に映し出される日を待ちたい。

テレビ静岡は来年、新生明治時代に海外へ出て行った日本人の魂を描く予定で、吉田忠七の悲劇を1時間のドキュメンタリータッチで番組に制作したいと、意欲を見せている。

作家・国土交通省独立行政法人評価委員会委員*